



重修真書太閤記

三編
七

13
459
27



18 様
門外 5
號 459
卷 27

消
福
亦
重
修
真
書
太
閤
記
三
篇
之
十
九

重修真書太閤記三篇之十九

城兵等寄手の陣と乱妨乃事

并諸將等再度本陣を圍い事

楠七郎左衛門正具計策より八田乃押えりあり
ける佐久間右衛門尉阿閉淡路守同萬五郎五千余騎
夜討の爲に散くし打取し本陣を長島門徒ホの
不意に乱入し騷ぐは信長旗本の侍ありて敗走
城攻の諸將等まてか本陣へ馳歸りしを大河
内本城の責口三方とも大将といふ者形く空虚とあり
りハ城兵等時あそ来つたりと打て出寄手の構たる

同
會
攻
印

大開記三篇之十九

鹿垣を引破り陣を乱妨形々々々西方乃陣を
かつい柵木一本抜くも叶へば結句城兵數十人討死
をり理あるうふ佐久間氏家安藤等が代りて遊
軍木下藤吉郎秀吉三千余騎にて守り居りしを
知て寄けりて不運形と本陣に夜討の入りしを
諸將周章うきつき馳出けりて秀吉おし止めてし
と本陣何れど騒ぐくくくく面々請取の責口しり
捨走り出ると甚以て然るるひその跡へ城方うき
急度陣を亂妨まじり用心形々々々諫めはまど
も耳も聞入らぬと出行けりて秀吉我陣を堅く戒め
る兵士一人も動くことなれ但諸將等々形本陣へ馳

行へ我一人行ざらんも讒言の種形々々々其
一人本陣へ赴く處々々々手乃者三十餘人を引連
いとぎ本陣へをを行竹中半兵衛淺野弥兵衛兩人
又陣中と守らを置たり爰小於々城兵等寄手の陣
を濫妨り西方へも攻めりて竹中半兵衛軍慮
まかゝあ記名士あまじば三千余騎と二ツ又別銃炮を
配り用心嚴々々相待けりゆゑ城兵等西方をわり
破り得どあまじく銃炮しりて勇兵等小突
伏らば手負死人多かりしに早々城中へ逃入る
竹中半兵衛討取つる首ども本陣へ持を遣りしる處へ
信長還御ししゆあまじく御覽あつて味方の兵士

本陣已三編卷之十一

等夜討に襲るも疵を蒙るもの多く敵を討しその
一人も形々その上八田乃押えし差置まじし勢とて散
こ小敗走し船江乃寄手も敵に謀らまじし引返し其
上城の四方攻口乃その共本陣の見舞に來りし跡まじ
陣を濫妨せしと柵鹿垣を破られし中小木下り手
まじり首尾を合せしと神妙なり奇代ありと賞美
ありし重祢く宜し様是れ石山本願寺の門徒等り
所爲なり當國を平均せしと後直に摂州へ進發し
石山を責落し顯如父子を生捕彼門徒共を悉く打
滅しその鬱憤を散まじしと罵りしと諸將りし
まじり口を鉗りしと折しも木下御前へ參上し

大将の恙あらずと賀し終り諸將も向ひ本
陣乃騒動を聞き馳着あつし尤のこまが前以
て君より仰付置まじし旋に因ら面く預りの責口を
退るあはれき答なり然るも思慮あまじく退るまじ
本陣に馳來りあひしと城兵とも能く思ひ面
の陣處へ濫妨せし本陣ある本陣の守護あり殊に明
知光秀の衆ありいりある火急の變ありともまじり君
御一人を警固せし奉るんどのこまに事おくをまじり
まじり又まじり本陣へ見舞あまじりも自身く預りの陣
處に備せしとまじり某とて今少しをまじり
參上仕る處に答あまじりも西方を道遠くまじりに手

勢も少くゆゆの急あまを引分ちさんこと難儀ゆゆと
彼是心配仕り役所の守り油断あまき様や付ゆくと
あく大小暇どろやうく只今馳参つてゆとやあど
諸將りづとも赤面しく詞あく信長ゆゆ一向長島
門徒乃加勢ゆゆと怒らる龍川一益ゆゆ兵と分與へ急
よ長島と攻さゆゆ門徒等と切尽し夜前の恨を散
よとまきゆゆゆと宣ひゆゆと秀吉かたく諫めゆゆ
ゆゆと彼等が狼籍と悪くゆゆゆゆと決しゆゆ石山
ゆゆの下知ゆゆあゆゆひまゆゆ長島と門徒等乃私の計
儀のあゆゆ処あゆゆと必定八田の楠が謀る處に相違
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ八田の押あゆゆゆ

佐久間陣へも加勢とゆゆゆゆゆ彼輩参着仕ゆ
ゆゆの夜城中ゆゆ討ち出ゆゆゆゆゆ謀と合を
證ゆゆ正具いゆゆ小智勇拔群あゆゆも押の兵士五千余
人新手的加勢も五千余人あゆゆをて一万余人ゆゆ中へ
ゆゆゆゆゆ五六百の勢あゆゆ切ち出らゆゆまや然も加勢
ゆゆ来まゆゆゆの夜討出ゆゆゆと實も楠相圖ゆゆゆ
ゆゆ知まゆゆゆゆゆ何の好ゆゆゆゆゆと石山上人
ゆゆ當陣へ大勢の援兵と下まゆゆまや援兵と下ま
好あゆゆ何ゆゆゆゆゆ夜討の濫妨ゆゆもあゆゆまや
ゆゆ當陣の門徒楠正具あゆゆと名乗ゆゆゆゆゆ石山
ゆゆ指揮ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ抑正具深

本願寺を信し故に君の御憤より石山へつらむを
さらん爲に正具う身は引受しと覺えしゆくと弥石
山上人乃知たることふいゆを以然るに君石山上人より
り怒らざるもつて神速に長島へ軍兵を遣し向む
りあまきまに楠めは謀られぬこの淺智をあらわし
道理より依り此始末をの終りし置は唯本城
を落して國中平均を專と思召されしへ一船江の
城と申も只今急に攻拔きあふ及ぶは大河内を
落城仕らるその餘の枝城一日ありとも休えしを
きや即日降参仕るをきよめ免角御心を決せり
且大河内を攻潰さるべきよしとて言上をせしめ信長

聞食本城を落さんといふ論ありしを良もとせしが
八田船江の奴原坊をあたふより先是を除んとあハ
田小押と置船江を責つる小味方利ありあまの
夜前のめし心外の始末は及べう然るに兩城を
置く大河内を攻へ必定今度乃と死妨げあるべし鬼
角八田船江をそのまに捨置んと宜しとあせしめ
むとこの上大河内急に落しがさしその間小兩城を
責落し大河内の援を断べしと仰らまじつて秀吉
謹くすしつと謀りて一人の兵をも用ふべし
いふんや一城を如斯くして責はをむらんや何
れや味方は勝利ありとていふや兩城を御心の

また攻落さしゆとも味方の兵士を多く損しゆ
べし就中船江ハ格別八田の城小於くハ容易ニ落城
仕なりく覺ゆいつきも且兩城ニ押えと置をらし
ひとへ本城小向をせ給ふべくゆきまつて船江八田
の城を責めよハ俗のナリ負腹立ましく却て楠先
ニ笑をさしゆべしと申にうて信長うらゆく宣ひける
ハ五千の兵士まで押えとせし押えりぬハ八田乃城こ
しと手固く押えんとあはれ凡人数一万余人を用ふ
べし徒にやとの兵士を押しに置まらんうり只一時
責小責伏る方然るべしとありしと秀吉押之ハ
田の押多分の兵士遣らるる及がハ拙者手勢の

うら五六百人も遣らるゆの事たるをくハ船江乃城へ
も千余も遣らるゆの事闕ナ海下大勢を却て
然るをうりゆと言上と信長いふ不審ありや
いふゆを小勢を以て押えんと云その備立覺束
ありと仰らるるか木下畏る上りる軍の道を
虚實の二つを機に臨み變に應じて計る善と仕
ゆとのゆ言上仕るる殿も知召し了処おのされ
ハ八田の城を先ニ五千を以て丈夫に圍居るゆひ
と味方の實道少し然るを楠をうり小五六百を以て
討破りゆ敵虚道を用ひ一處より依る口今五
六百乃弱兵を以て押しをらし味方の虚を以

て敵の實よりある道理の正具知深く謀ありて慎
厚き兵士より大軍の仕損たるその跡へつら
の勢よく向ふものを尋常のこころいひしめしむ
一定奇策ありて城方を偽引しものと知べく左もゆ
その二の町の謀と案と得む勿く打て出るといほ
こそと考得ゆらん五六日の隙を費とて一それ
ゆどの隙より本城を攻落ししとて虚實變化を
活用する兵家乃極秘の詞を尽し理を乃
い信長得心す然宜しく計らるべし許
さしけりし秀吉西方の陣は立歸りその内より五
百余人と擇出し松原内匠永江半之丞兩人を大将と

ふし方便を委碎しし含光八田の押えし差遣をば
船江の城へも塙九郎左衛門を大将とふし一千余人
を信長より差向らしと諸城攻乃諸將を前くれし
責口小向しむ柵鹿垣を丈夫と結しし西方へ
佐久間安藤氏家を遣らし木下をいし旗本へ
呼返し遊軍とふし諸將一同は城を向ひ此度
を城を攻落し陣と乱妨をせし鬱憤を晴さん
ものとし勇氣を含んて備えし
織田殿軍評定乃事
并木下明智諫言の事
船江籠城の輩へ織田勢新しを加え大軍して嚴

大問已三編卷之十一

二

攻立しから随分防禦術を尽しけり始終叶ひか
たく難儀と思ひしに信長の本陣一向門徒等々狼
籍して以乃外又騒動を以て寄手もかく退散
を以て城兵も蘇生の思ひを以て悦び勇むと
いへども再度大軍より寄来り如何なる暴戻の
振舞ひありんばと恐怖を以て今度こそは
一千余りの勢よく押来り只遠く守り居るを以
て油断を以て先差當り急あるとおけし暫息を休めてける者
まゝ八田の城も楠正具が謀成就し思の儘に當
敵を追拂ひしに本城の圍も一旦退去と

を後誥及るに船江の寄手も退きしと實は十分
乃勝利ありと悦喜限りけり士卒の功勞を賞美し
夫は又恩賞を與へし本城を援ふ謀畧を工夫
しける処小織田勢よく押寄来り城下は陣を以て
備を立るとし其勢も五六百は過ぐ隊伍
も定まり四度計りけりか駈出さる蹴散とべ
しと城中乃若武者勇まじしと正具自身櫓小上り陣
を望見し味方を制し決して打出るとありしに
以敵乃小勢を侮へし鹿忽に振舞して敵の謀
も落されあは後悔を以て詮あはる五千の勢よく
押しきたる敗軍を以てその跡へ五百計り

大開己三編卷之十一

向ふと不敵なり小あかも陣列備への錯とるるを態
と破と安けよ見さうけ味方を偽引謀とのそくも
知れしものあるを輕くと打く出羽を一定悉く捕ま
せんとす又幸に打勝たりとも味方何やどの
益うゆべき既又前夜思乃まふ勝利を得よと此
度と慎く守るるをさ處と知べし惣と十分の禍の基
なり盈損といふことあり必勝利は募るべくはと
固く制止を加へけよと城中より押えの兵士を見
もせぬしよそたて用心怠るる守り居けり斯く
大河内の本城の寄手等東西南北の谷より責上
り乗破んと勇進とも城中の兵士等銳氣撓るる粉

骨碎身して防ぎ戦ふを以て敵味方の討死手負わ
まことあまとも乗入るるを間を得よと只徒に戦ひ暮
して八月下旬より十月中旬より及ぶ手と替術を尽
して責せしも落城とせき体もあし寄手も今を
攻め退屈ししを見えたりける信長諸將と
集り評定あまとも施よとさ方便もあしと斯て
宜くんと言上よる者もあし信長大息繼で宜く様
我漸尾州二郡より起つて遂に美濃尾張伊勢江州
と切從へ五畿内と平均し將軍家と守護し奉りし
後諸國乃動亂と鎮め四海一統静謐と歸せし先ん
しと心掛あがらるる大河内の城一ツ小數萬の

大略言三編卷之十九 九
勢と起し五十余日と費してその功立と云ふかく
てと諸國の名將勇士の籠つたる城と何とて落
し得るべきや所詮運と天の任と七萬の物惣勢を以て
四方一同に責懸て死亡といふに勝負を一擧に決
まると宣ひけるとき木下藤吉郎進み出さるる
御心と苦めあふ及ぶに當城を圍てて五
十余日おつその間も城落とて殿乃引矢の鉛き
と中におもあはれ兼て聞食及ぶと一ともいへ
中國乃尼子晴久雲州富田の城に楯籠毛利元就の大
軍と引受合戦七ヶ年ふ及べり是と富田七年の籠城と
今も世に沙汰仕るるゆゑ也

尼子晴久を京極大膳大夫高秀の五男尼子五郎左
衛門尉高久六代乃孫父の民部少輔政久祖父を伊
豫守經久なり晴久初々三郎四郎詮久と云永正
十一年二月十二日誕生永禄三年十二月廿四日四十七
歳にて卒に富田落城を永禄九年七月六日お
て晴久乃嫡子三郎四郎義久乃代ありさるに富
田七年の籠城を晴久卒後の事と知べし
然ども毛利元就名將たりがゆゑに憤怒を起さる一
度も麓忽乃軍を以て心静ふ守りつめ終に義久を追
落し雲州を切取たり
永禄十二年ハ毛利元就七十三歳いまも現存あり

大略言三編卷之十九

然るに我君漸五十余日の間小勲功ありと云く憤
怒を發しあは程ふくいで諸國を征伐ふくあはさ
や要害ゆく能士多く楯籠て兵糧矢玉藥沢山ある
城に向ひ容易く落さんと思召さざること恐き多き
中條よりても近頃御早まらふやと存い又如斯城を
無体又責落さんとあはる若干の士卒を損し
一假令城を落し得たり共股肱と頼ませあは士
卒を失ひゆき何の益りゆき日數乃一年二年を経
とも味方を損ぎ銳氣を落さば軍威を盛まら
ゆへ敵とのつら勢疲し一降を請り自滅する二川
の間を出どゆ殊は死生を顧みば無二無三又責む

んことハ殿乃軍法を他人小計て知りし種あくいな
も勿体ぬくい能く備を立置聊も御憤怒の氣色あ
緩くと攻させむ御本意乃如く御手小入りし當
城の体を見ゆ小最早格別御隙入りしゆいやうて
和融乃義まて一國全く御威光又服しゆえんと鏡
うけく見えゆと諫めやあは信長聞食尤の
あはる大軍を發し征伐乃たあ来りしゆ城剛く
とて此方より和を求めんことあはるに輕忽しゆ
べし籠城の兵士又嘲り笑るれんも無念形ゆり此
方より和睦をふさんとあはる國司方より利を付
調ふまはるゆとて敵は利を付あは味方乃諸軍勢

大目已三編末之二

出陣せし甲斐あまらざる且此以後我下知は従ふ
 然る當國平定するとも隣國乃輩の聞んと手
 前も耻らまらざると宣ひけり秀吉云く此方より和睦
 を望むはあはれ國司は利を付るは及ぶ當國一圓
 殿乃御下知は従ひ武威まると國中は溢るは自
 然と仁政は靡きゆ一とさるるは終るは和睦
 と仰出さるるは然るは先味方の威を示し敵
 の心中を怖しし是は大河内乃城中の士どもも
 毛角も龍城して開運と云き期おきとて知て諸
 侍の眷屬各々身構し遁れん道を求むるは
 と怖しあふも勇あつらんを赦しあふも仁に
 仁あり

勇あり殿乃はさか立むるはさきあまを
 小方便あり秘中の秘とてゆふとて言上しは
 智十兵衛光秀かさるる侍も進み出さるる
 様木下殿乃異見尤も聞えぬいふも大河内を要害
 城世は多くはゆふその上累代乃國少く兵
 糧箭玉薬沢山ありと齋藤あとの及ぶ外はゆふ
 然るは毎日く鉄炮のち合形と誠小無益と覺え
 ぬも諸將乃攻口を少く引下り城より撃ち出
 射出と箭鉄炮を避し是此方より更は攻めんと
 ぬく緩くと對陣ふしあまも木下やさく如く富田
 七年の籠城小毛利元就の勝利を得られしと同一

かたき 覺の富田の軍、其浪人して中國を經廻り、
頃、其委細を見聞てゆい、元就も古兵の智
者あり、敵を様とす、反間の謀をて互に相疑
か、めり、ゆい、小の城中一致と大將乃下知
か、諸侍心にあり、戦ふに利を得る、あ
ふ、終ふ、義久夫婦別、小出城とこれ共累代の家人
郎、從られと警衛とす、小及を以要害、うき名城も敵
乃手小渡りて、當城堅固なり、も富田も、も過
ゆ、元就の軍略、習をを、忽、落城仕
べ、取合を、信長も、悦を、ひ、
小かく長陣を張上を百日二百日は及ぶと、何の障り

う、あ、べき、但城中反間の方便あり、否と問を、あ、を
光秀承て、其、謀、之、き、便宜、乃、之、バ、工夫仕り
く、見、ゆ、敵城乃勇士と味方小招き若招、
應、て、来、て、ゆ、敵乃手と、あ、と、誅、し
ヤ、木下聞、能、を、思、付、し、を、の、哉
拙者も左、あ、ふ、富田乃事を、出、して、ゆ、
去、り、國、隔、て、人、心、同、か、元就の策と一般、も
察、し、思、慮、を、練、も、肝、要、を、し、
と光秀聞て、臨機應變乃教あり、時と所の差別心得
て、ゆ、秀吉大、感、尤、左、様、あ、る、れ
と、殿、乃、御、爲、寸、志、を、述、て、ゆ、貴、邊、の、心、中、た

大目言三編卷之十九
おもしろく然る何乃危きことかゆいんや多くその謀
ふのらせむと諫免しかば信長もあつて喜びせ
あつて随分首尾よく堅固ふものゆへと仰出され
けつらう光秀も面目を施しかつあつて退出
と諸將のつとを役所へと引入て乃らの便宜を待
小しう

重修真書太閤記三篇卷之十九終

重修真書太閤記三篇卷之二十

明智光秀謀計を行ふ事

并野呂左近逆心忽小被誅事

大河内乃城強く織田乃大軍數日あつて圍
攻に共兵士乃損亡乃多くて城中弱る氣色も見
えどあれは依く信長諸將を集め評定かゝるも
神速よあつて降とまき策もあつて木下明智さへ
これと諫免けつ光秀一計乃行ふゆきあつて
言上かゝり信長聞食早く行ふゆき由を仰ら
げしを光秀畏り我陣に歸り郎等奥田を召出し謀

太閤記三編卷之二十

乃次第とや含めてりうあれを國司の家人小野呂
左近と云ふものあり極めて欲心深く財寶を眼ぞりけ
る君父をも忘る倭姦乃小人ありあの奥田と一面
乃交わつげさの究竟乃とありとそ光秀數多乃
財寶を出しこそを以て野呂を語らひひとひひ
さの奥田一儀も及まぬ密書を認めあまを
呂り持口西真虫谷一の備といたり見まの爰は佐久間
り請取の役所あり奥田佐久間に光秀が口状をつげ
然のら密書を箭より括つて付野呂陣所へ射込と
けさの野呂が郎等これを取て即左近小見をせり
左近とを披き見まに口小別後の疎遠を記す

奥小籠城始終叶ふも徒小討死せりまら織
田家降参ふも信長を英武の大將あり後々
天下武士の棟梁たり早く忠義を尽すれ後榮を
計りまもや御邊一人乃あり同士の人と語合て
味方又参さば當座乃恩賞莫大あり右等のと
より入用あは金子何れも遣さるも某あど
を今程の織田家小仕官して萬事不自由あり往昔
の好むあど御邊もあの安樂あやうらさく
角々中進ゆあり委碎を對面乃時を期しはれ書
しつげふ左近あの書状を得て熟思案しつる何さ
ま當城要害も兵糧矢玉沢山形りといふもの

大岡政談三編卷之二

織田と大軍あり始終保つとぞうほしげし終に
の面と同一討死せんとは必定あり信長の勢破竹
の如くあれ四海を切鎮せんとも遠く然此人
小随く身と安泰小過さやと了簡則返書小
仰越ふ趣一理又當りて覺え其もくぬく左と
おをひひとも是非あく一族とも一統小斯くして
の罷在ひ日夜身の安危を考へ心も心あはひ然ふ
小御邊の懇書を得て闇夜又明光を得たるごとく御
芳志近頃忘しかたく存ひ然いあく御差圖は従ひ
同志を招きやべくい去れり此度乃義貴邊の懇志
りともや又ハ織田殿もその心よておをくぬくよや貴

邊の懇志を疑ふはあはねとも織田殿の御前と思
ひゆ故又只今了見決し得むいとを記したり奥田
あの書を見く光秀に見きかハ明智大又悦び則織
田殿の内意おろして光秀乃奉書とたため奥田は
渡しハ奥田中ハ私の書状と添降参實儀よゆ
神妙の至おろして織田殿の御内意如斯と件の奉書と
送るの數多の金子と與へし左近いあく心迷
ひゆく奥田を頼しハおをくぬくや箭文とせゆも及
まひひをか小持口より使の往来をかたしける
野呂左近と文徳天皇の源氏あく勢州多氣郡五
ヶ條山の城主野呂越前守乃一族あり一書小阿坂

合戦の時誅をらむと云ふ

光秀の奉書奥田が書状小添たる黄金忽小反心を醸しけるふらう左近何卒城兵兩三人をよとせ織田家へ降参の土産よせんものと肝膽を碎き誰彼と思ふらふ真虫谷の二の持口を固めらる山本左馬助を語らるやと竊小彼所よりたり織田家へ降参の事を相談せたりけり

渡會郡一の瀬御所の侍臣山本左馬助氏定とりし

宇多源氏なり

左馬助心中小借いあの男敵方へ心を通し我をも引入んとするものありと察し偽りて悦びの体せかし

某も左のそ有べしと思へども然るべき便宜ありて

一日くを黙止しけりて答へか左近を同心せし

と悦喜し奥田の書状明智り奉書より取出て見

せけるふらう左馬助まこと悦び如斯便のあり六事

既小成就をり我まこと一兩人勸むべきものあり王井

兵部朴木隼人と某と竹馬といひ入魂乃者あれを

語合せん小否といふべし此書状を以て勸められ

誰とも同心よとまきありとせけるふらう左近誠と思

ひ書簡を山本小らるるあを無墓しと左馬助を

件の書状を懐中し直小本丸小昇り野呂左近逆心

を企く寄手小内通し味方の諸士と語合ありと既よ

如斯かくの捨置すておきまわ御大事ごだいじも及およびひひのの但多たくく乃の侍しやくと語合課ごごうかをを思おもひひ某それも一味いちゐ乃の体てい小こををてふふ斯有證書そくごうしよを欺あやままり取とりててひひと國司父子くわにすいふしへ訴うへへいいままべべ不智齋入道子息信意ふちさいにちうしよ大おほいいううを憎にくまま左近さしんうう振舞うららふ急いそまま呼寄誅戮よせよよとと家老けらうを集あめめ評ひやう定さだめめららいいづづも山本左馬助やまもとさまのすけ忠誠ちゆうしやうと感かんずず野呂のりよが逆心さかを怒いららずず早はやく誅つせせられられとといい何なにある禍わざはひを引出ひきだししべべとと山本やまもと左近さしんを捕とらへへ来きまますすとと下知したしををれれたりたり左馬助さまのすけ即刻きやく野呂のりよ持口もちぐちは行向ゆきむかひ玉井朴木たまゐいととは漸語合しぜんごごああららずず何なにも御邊ごへん小對面せうたいめんををんと望のぞむむ早はやく来きりりく打合うちあひひををいいへへ左近さしん何なに乃の用意よういももおおくく山

本もとと同道どうだうして持口もちぐちと出本丸いでほんまるの口くちと過するるああらら數多かずおほの兵へい士し走出いでで声こゑととをりりけけと左近さしんと搦なめめ捕本丸とらほんまるへ引立ひきだ立た行ゆくく一應いちおう乃の拷問こうもんも及およびび早速はやそく首くびを刎きたりりけけ借後せきご左近さしんり家来けらいともともを悉しつくくめめ取とりりてて山本やまもと左馬助さまのすけの持口もちぐち置おききたり實じつも歴代れきだいの主恩しゆいんを忘わすすれれ北父祖親屬きたふそしんぞくの慈愛じあいを棄すてて只ただその身みの安穩あんゑんを祈いのりりけけふふ天罰てんばつののややととををおおそそろろけけは斯有そくごうしよ後國司ごくわにすい乃の家け老鳥屋尾石見守らうとやぶいしけんしゆややけけるるハ野呂のりよ敵てきと組くみぎぎに付つて敵てきと討うちちべき謀まわわりりたたとハ野呂のりよ持口もちぐちへ寄手よせてを偽引いつはりひ入いれれハ寄手よせて何なにの思慮しりゆも及およびび定さだままりりてて来きりりととその時思ときしふふ終すまりり討取うちち取とりりハ心地こころぢよよめめるるととややけけるるふふりり國司父子くわにすいふし

大に悦ひ早く山本左馬助とて野呂り手跡を學て
書翰と認るは是と寄手の陣遣とて玉井兵部儀
田彦右衛門等面々の勢と率一山本小力と合とん
と合圖と定め待りたり此時寄手の陣中ふく
ハ明智光秀野呂左近が音信を待詫て如何とて
やらん遠く一と案ト居る処へ左近が許り書
簡ありとて遅くと披きこれハ同士の輩も彼是相
語ひいもく降參仕るべくい去れ一すの功もかく
參陣仕らんと面目の間に某持口より御勢を引入
真由谷と御手小入とて然ハ御勢并御檢使の方
と忍びやう御入の某手初の功は城内の御案内は

べしとて書たりけり光秀みれを見く甚悦び急き
信長乃御前へ罷出野呂り書簡を以て志らくの由
と言上り御勢と彼持口遣とて望とて
ける小信長暫時御思案ありてその諸將を召出され此
事如何ありと評定ありてあふ小木下藤吉郎明智
ひく御邊り計る処疎畧ありしをいしを此書簡
乃趣いさか疑惑あり野呂左近同志と語ひ降參實
儀なりとて人質を送りたる然るべき士と使節小立
べき小左はかく只謀計の手段とて入初參の功とて
と遣りしとて條不審を少しとて鹿忽小味方
と遣りしとて能く御勘辨ありて然る一數年の

大関三編卷之三十一

五

籠城と申にもおし城中の銳氣いまさへ壯あり容易
く降参せんといふやその左まで多くありま
しとあり一方一味方を引入とせと皆殺しとて笑いと
乃謀おろも知るべしと今一應野呂がやとて御聞か
く後ふても遅くしとやけふも信長何さ毎も
ありふん然ら軍勢と遣をいしと止め野呂とけし先
降参同志乃者の人質を送りしとや遣をいしその
返答より又此方にも手段ありと仰出さしけ
るより光秀も口惜くおをへとも木下り中処實に
も道理至極ありと達し野呂が書翰小従をいし
とを勸免奉らんと即時右乃趣と答遣し早と人

質と出さしと促ししと城中案と相違し如何
とてまきと評定ありしとを偽つと人質とありと云
ふのもおし儲と此方乃計策漏れしと然らば野
呂が書翰を疑し侮りつと織田の軍勢やといひて
更し返答小及をいし光秀いしとまき立しと書翰
と送つとまきと何乃返事もなく儲を偽つとてあ
つとけしとありしと心中いしと穩形に佐久間信盛を
うたひ光秀が勢がかりとて一責攻んとしける佐
久間も然るべしと同心し光秀が謀又任をてゆし
てし

十兵衛尉光秀謀計相違の事

并秀吉敵兵を捕え拷問の事

明智十兵衛尉光秀は野呂左近を誅せられしを知りて
度々書翰を遣はしつゝともその返答もきかずと
憤り事の實否を糾せん其西方の寄手佐久間
右衛門尉持口を以て手勢五百余騎にて一攻責んと
行向ひしに佐久間を以てり明智と入魂ありて快
く持口を以ての上より勢を引分援兵とありて
光秀悦々自身真先小進と真虫谷より責上り一乃
持口より寄短兵急を以てり付ひて野呂左近小
對面をんと音信しりと其城中少て先度送る野

呂り書翰乃計相違を以て悟り持場を固めて
用心嚴しき処ありしを以て其ひるも鉄炮を放ち
木石を投りけり戦ひけり山本左馬助寄手の奴
原の膽を潰させ笑るゝやとて野呂り首を鑕乃先小
貫き堀の上より差出しを以て左近は對面ありて
いひて城中一度又瞳と笑ひて光秀郎等ありけり
奥田を呼んて是を見せしむるは野呂り首は相違な
けり此の諸へ降参るゝと顯れ誅せしむるは愛
乃持口代りて味方を引入んと計つゝ其のありてかく
てを如何小責るゝもその詮ありて重く工夫し
責破らんを以てと思ひけり此の士卒を以て引退

き本陣へ参上し、面目も取げし言上取し、かの信長心中、
中小秀吉の軍旅と鍛錬を感し、且光秀
の遺恨をうらんだため、側近く召寄らせ、左様の所へ
行向ひ汝をれい、士卒を損を引揚し、あは尋つ
ぬの、ものあは、大敗軍とせし、そのを宣ひ、
光秀いし、か面目を施して退出し、何卒一、乃謀を
勘考落城をさし、免んそのを肺肝を苦しめ、又
木下藤吉郎と奇計多きをあり、か何卒して城
兵五六人と生捕を、かを以信長へ内意を告て秀吉
とづ、北方の寄手坂井右近齋藤新五郎等、陣所
又行向ひ密に謀を示し、合を城兵を虜んとし、約し

川廣坂口の味方獅子垣の外へ伏兵を置計ひ、べし、
定免秀吉手勢を國人の如く出立を寄手乃陣へ夜
討し、休よをて、か城兵を囚き出さんと謀り、その
夜寅の刻過曉近き頃、寄手の陣より火乃手燃上ふ
とひ、く、俄に陣を騒動し、夜討入ると呼り、
関を作り、鉄炮を響け、乱れ合て戦ふたり、城兵是
を見て、と、寄手の陣へ國人等、夜討せし、と覺へ
たり、此方より、も手を合せて、助る、と、此手の守護
鳥屋尾左衛門尉水谷刑部、俄に兵士を下知し、持口乃
木戸を開き、切き出寄手の柵鹿垣を破らんとし、
ゆるよを寄手の陣中い、く、騒動し、戦ひ、今を盛くと

見えしかの城兵まよらしく力を得押詰く鹿垣の際廻
る処を見よと仰寄手の陣中より相圖の鉄炮をふ
らふかの伏置たる坂井齋藤の勢一度は颯と起り立
城兵を差ろさみて攻立まば寄手の陣中の騷動は忽
止とひとくく打出三方一緒に攻けよと城兵大に驚き
儲と敵乃謀りてありけり早引と呼ろつて周章ふ
た先き逃上るを寄手の兵士等追うけり兼て下知
せしとあまの疵を付る及を以て十余人を生捕り
たり坂井右近此勢に乗る附入の附入つてと勇ま
るを木下堅く制して難所を行掛り敵方の鉄炮矢玉
は防がふは遁をわきまをのり今日乃働元敵の

兵士を生捕んが為なりをいふ此儘小引退べしとやに
を坂井も止しとを得ど追捨ふして陣中へ引返すと秀吉
生捕の兵士等を召具して陣中へ歸り一人を引出し繩
を解酒食を饗食應に金銀をわき言葉をしげくや
けり大河内城中諸士乃人質をい何処よかく置つる
よや汝等知たふ有のやにやへ左あは猶恩賞を
施して歸るべしとさぬくよとよか一向に一向よ
存せしとて告る者もあり又は其処其処は隠置由り
者もあり互に區をかう五人り中口は一同小て更に疑ふ
へくもおしよの秀吉あの上尋問ふよ及つととて十人
人の生捕共よ夫と褒美を與へ陣中へ留置藤吉郎密

大問已三編末之二十

小信長乃御前へ出く生捕の者共の白状を以て由と言
上と國子父子乃北の方一族歴々乃妻子共々多藝谷
乃館小ある由之籠城諸士の妻子ハ臍ケ窪の奥よりし
置旨慥々相違なくハ此等の方便を以て落城せ
せしめしめし上りて信長大悦をせむハ早く其方
便を行ひしと仰出されり爰ハ明智十兵衛光秀を
數多乃金銀を損失して城中へ反間一野呂左近を
殺ししハ外ハ其を以て功を立んとの
目とて思へしを更なるに工夫もあはれ木下藤吉
郎城兵を生捕て人質の在処を尋問せし趣を聞出

一密小その實を探り知急度思案しけるハ城中諸士
乃妻子を奪取し之れを餌として降参の輩を釣べ
左めは自然と落城し及ふ道理ありと勘辨し信
長へ此旨を言上し及へ信長木下を死せし明智ウチ
旨を以て評定ありける小秀吉ウチハ明智の勘辨
さし一処一段より聞くに今とて思慮
乃足ぬ所あり當城の強きをあかり要害の故
乃小をわし籠る處の諸士ハ國司の一族ま
譜代恩顧の古兵あるハ一命を國家乃存亡にほりせ
君臣主従一致を以て故を以て然らたしハ妻子を奪ハ
ししを以てその恩愛小ハ忠義の心を變りし

へさや妻子を奪取ゆるいめく必死とせりまをどく
堅く籠城ふしつべし野呂左近り金銀も迷ひし志よ
つとて一味同心とるをの無うて城中諸士乃勇あり
義あることを知食べし君數萬の大軍を以て攻詰
合戦乃術尽て諸士の妻子を尋出し押えて降参さ
せんことを謀り未練の所爲といえれんも口惜かふ
べしつら國司家の侍の妻子の愛小溺れんとせりか
んと高言いそぐことを聞惡のそへ然らば妻子を奪
取んと近頃思慮あまに似くは某敵兵小入質妻子
乃在処を拷問仕ゆとの奪取やべき爲よそへゆを以別り所存
のあつてのそへいその計策の中やべきや否よめつとく

ゆとを的中やさごとく味方乃損小をせりや
ざかると少くはつ行ひ見やべし去とて明智の思ひ
ふらむしとせむ妨ぐあるをあはれ一應の所存せりま
でふいとやせむか信長聞食木下乃や茶やづ聞え
たりその通て行ひゆへし秀吉乃計しとてあ
形くは光秀うおをひらつし如く計らひゆくと仰られ
しめは明智も爲方形くやづ秀吉うやむよ小従ふ
けり

重修真書太閤記三篇卷之二十終

大岡記三編卷廿一

重修真書太閤記三編卷廿一

木下智謀多藝谷の館と兼取事

并織田殿大河内城中へ使者と立る事

木下藤吉郎秀吉ありひ付らる謀ありて城兵と生
捕國司ありび諸士等の妻子とわら置所と糾問な
しるるに多藝谷のどる由と告げしは是天の授る處よ
し伊勢平均の奇謀とありひ定めやうく生捕との
甲曹と脱と秀吉の手より忍みあれらる兵十三人
撰出しるるをと着せ國士の兵士の體とありひ多藝
谷の奥ある國士の館へ忍むて路案内と伺らせ処々あて

大岡記三編卷廿一

の謀略といひあぐり首尾と見合一兩人の立歸り容子に
知せしむらぞ下知しける實もこの十三人の事と馴た
る者共ある夜ふまゝに多々の敵の中と一のびく難
あり通り越館の案内筋道のつまりまで伺をまゝ三
人の木下の陣へ立歸り始中後とちも告ぐり
あゝ秀吉あゝび此者共謀と授け多藝谷へ歸しを
のち秀吉この由と信長へ言上し多藝谷と襲ひ國
司の簾中諸士の妻子と奪ひ取んと十月廿日の夜も
あゝと三千餘人と引率し彼処に押寄ける抑あ
多藝谷といふ処は大河内本城の東南にあつり尤險岨
の切処あり國司不知齋入道あゝと館と宮造簾中

しめ姫君公達とあめおと遊樂の休息とに要害と
絶景の處あるも不案内のりなやと至る地
あゝ然るに秀吉倒の忍ひて入て路次と探りられ先
たてて五百餘人この谷隨一の難所と越り岩と傳ひ忍
び上り多藝の館の右に林の茂るに置残る
兵二千五百餘人と谷の本道より押寄せ一日乃夜
丑の刻に兵糧つるをせめて曉んとするあり龍藏庵
の尾崎と廻りて攻上る多藝谷の如き切所ある
とも國司の親し方々の御座あるれ一族の大河
内宮内大輔森本飛驒守と大將と二千餘騎を堅
めり秀吉元よりあゝと伺ふと妙と得られい

あも方便^{たそろう}國司の親戚と奪^{うば}ひ取んことと専^{せん}らあ軍
い左のこ心で入^いびた義勢^{ぎせい}とらうり真先^{まのまへ}に進^{すす}段々^{だんだん}と
攻^{せめ}上りまてふ夜も明^あるのとらうりあろ木戸口^{きどぐち}に押詰^{おしづ}
関^{せき}の聲^{こゑ}とあけ鉄炮^{てつぱう}と打懸^{うちかけ}けるふらうこの頃^{ころ}城中^{じやうちゆう}に
てい何^{なに}の口^{ぐち}を軍^{いさ}と止^やめた對陣^{たいじん}して居^ゐけるふ馴^な今日^{けふ}
めく近^{ちか}くと攻^{せめ}来^きらんとい思^{おも}ひもよる殊^{こと}更^{さら}あ口^{ぐち}の嶮^{あぶ}
岨^そあくと不知^ふ案内^{あんない}のりめたやと来^きまるといあはれ
あのれう心^{こゝろ}ふあ後^{あと}と許^{ゆる}しあつ籠城^{ろうじやう}のちとめらう一度
も敵^{てき}の寄^よしとあけとい自然^{じぜん}と用心^{用心}も嚴重^{げんじゆう}あはれ
油断^{ゆだん}とあはれ木下^{きのした}り勢^{せい}寄^よ来^きりし驚^{おどろ}ささけ朝
霧^{きりぎりす}あううう寄^よ手^てのめさも見^み分^{わか}らせ城中^{じやうちゆう}以^もの外^{がわ}周^{しゆう}

章^{しやう}しとて敵^{てき}の寄^よささせと俄^いふ弓^{ゆみ}鉄炮^{てつぱう}鎗^{やう}と太刀^{たち}よと騒^{さわ}
動^{うご}せりされとも要害^{やうがい}よけとい急^{いそ}よ木下^{きのした}勢^{せい}を乗^の入^いり
さび坂^{さか}の下^{した}みあつさつ見^みへけるふらう森本^{もりもと}大河^{たいが}内^{うち}
さひし下^{した}知^ちし手^て別^{べつ}とあ矢^や玉^{たま}とあお防^ぼ戦^{せん}
ひらり秀吉^{ひでよし}元^{もと}り敵^{てき}と驚^{おどろ}め味^{あじ}方^{かた}の勢^{せい}と盛^{さか}んよな
城中^{じやうちゆう}の銳^{えい}氣^きと挫^く策^{さく}あはれ谷^やに向^{むか}う関^{せき}とつらとせ
樹^{じゆ}木^{ぼく}と叩^{たた}く聲^{こゑ}と揚^あげらふらう勢^{せい}のめさも見^みえさ
ぬ霧^{きりぎりす}の海^{うみ}のあはれあ響^{ひび}き合^あひあはれあを
もあろろこの時^{とき}木下^{きのした}り置^おける五百^{ごひゃく}餘^{あまり}人の兵^{へい}士^し
等^らの夜^よ中^{ちゆう}より閑道^{かんどう}と經^へく切^き処^{ところ}と凌^{しの}ぎ城中^{じやうちゆう}へ込^こ入^い拾^{しゅう}
三人^{さんにん}のとも共^{とも}の案内^{あんない}とたのめ二^{ふた}手^てに引^ひ分^{わか}戴^{たい}百^{ひゃく}五^ご十^{じゅう}餘^{あまり}

人の樹木の岡に伏せし二百五十餘人の案内に兵士成
先立ち國司親戚の忍びひひけし館の後あいつる合圖
の時刻と待ける處に大手の合戦をやりと見へ大
勢あめさし叫ぶ聲聞え館宿直の兵士等も大形大手の
持口に向き働さるる体と見せし今ぞ天の授時
あどやと勇を悦ひ我先と館の内へ乱をりり出合も
のどバ切倒し館の奥へ進み行敵のよきてゆるり
あおろしやせと方便り國司の北乃方とあり一族諸
將の妻子從類一人も残さばあるひ輿あるむ復輿よ
かこのせ集ひ取りぞ走り出ける
國司權大納言具教郷入道して不知齋といふ簾中ら

六角彈正少弼定頼朝臣の女とあるち左中將信
意郷の母堂也
あゆこの侍女半婢あき叫び狼狽あはりけるを追立
追立せし三十餘人と召具して引取りて大手の戦
む急なるまば鳥屋尾水谷あんととめ歴こをみあき
と知れ防を戦あつとふ館の方俄に物さるりく聞
えしゆを何事やらんと大に驚ら馳付んとあり折
節館の後乃樹木の岡より火燃出暫時の間は大火とあ
り餘焰天と焦し城兵の方へ吹付けるあぞ鳥屋尾水谷
大に驚らあはれも何事ぞやと周章あつめさ兵士の
散乱するること大方あはれ且館の安否と氣遣急よ駈

付んとあつても煙と火氣は犯さる進むとあつたはさ
 も要害堅固の持口あり守兵乱を合防く者の備定
 まるぬ右往左往は敗走を木下みれと見とるあり手
 勢と励まりしとて攻入時あるを早棄や兵ともと進
 免けをばとやり切らる遅兵岩と傳ひ堀を越たりくと
 込入城兵どりののうらうらと切伏突伏追廻り内
 りり木戸を開く味方を招きくれば惣勢一度は乱入
 一無二無三は駈立けるほとよ城兵うらうらとこの數
 らば鳥屋尾與左衛門水谷刑部心むうらうらに猛けきや
 も敵の勇氣壯みし味方多く討きしものを防戦をか
 こびりりりの体み打あさる本丸さうと逃退るるは

此口忽破を寄手十分勝利を得木下藤吉郎館
 の内へ打入り落残る女性足弱の老若とつり介抱
 然る人々を供あつ本陣へ引返さこの外
 切處は伏置し木下の手の者へこの館と乗取守護
 けるが本丸より大勢打り出るを防戦とて難
 儀あるべしとありひ俄に柴築地と築く聊油断る
 丈夫は持固めり扱あし信長の本陣よこの間敷
 日の城責みさし仕出たるをたのむともあり散不
 快の処木下り手あつ多藝谷と乗取國司の北の方と
 しめ諸大將の妻子と奪取し心地より秀吉の勲
 功他も異ありと大に感しむひわつてら當城落去の事秀

吉の籌策に任ずるへさとのくく之爰ふ於く秀吉即等
ともと呼集め此館と堅固に守らざる身の本陣あり
り當城と改取へる手段と言上ると路に急ぐ四方
持口と守て取巻居る寄手の面々の事よあは遊軍
の秀吉よ多藝谷と乗取を何れも面目と失ふてを見
へたりける就中柴田佐久間日頃秀吉と不和と
ふり明智功と立さると思ひつゝも光秀の謀と
共相違して其功あり木下却る如斯大功と顯る
を面々の味方の勝利と悦ぶといふ心よあはれを嫉
みて快とさば然るも秀吉本陣より信長の前よ
み合戦のしめ終ると言上してのちけり様今度大河

内の奥ある多藝谷と乗破り國司の簾中せり諸
將の妻子と奪取ていへ籠城の兵士の勇氣と屈味方
に十分の威勢と募る此時はあはり君の御仁心と顯
御使と城中へ遣はれ奪取の簾中以下といふ送り
歸り和睦と進めらるる國司を云ふ及ぶその手乃諸
侍君の御軍法と感歎し中心よりあはれ服し
早く御使と被遣然るべしとせめけるも信長聞
食その方千辛万苦して漸く奪取し人質と直に送り
歸さんといふも残念ありばやまの簾中以下と止置國
司父子和睦をは送り歸せりと宣ひけるを木下諫め
やげの簾中以下と止めらるる君の仁心顯るれと

質として和睦と進めむら、彼必妻子の愛みひうまて國
の大事と誤りてとまら、銳氣と勵むべし然るも木下思
慮あさら、君の簾中と當陣中へ供奉しめ、
信長さる此興の軍と好む、依り簾中以下と送り
歸し、但軍の道は直と以り、貴と徒ふ士民と
疲ら、國中と惱まら、兩家和睦し、合戦と
止めたらん、世のめ人のた免安泰の基あるべし、
嫉妬の怨念と翻つ、順和の同心と起され、
即前田又左衛門管
谷九右衛門と使節とて奪取らる人質とて送り
歸さきて、

國司父子信長と和睦の事

并勢州平定信長凱陣の事

此時大河内の本丸の數十日の籠城あり、諸侍大將
より兵士に至るも勇氣撓まら、防戦秘術と尽し、
城中いとも弱る氣色と見れば、然る國司父子悦び
し、居らる處計らば、當城第一の要害多藝谷
と落さ、刺し國司の簾中とて、諸將の妻子と奪取を
し、言語道斷の次第あり、れも力と落し、
國司父子も大小周章し、のいの恩愛離
別の傷悲歎みせ、如何と仰天し、
処へ信長の使者來り、簾中とて、多藝谷

て棄ひ取り一女性幼雅の人々送り越る由と告
げらるより誠一々ありてこれとも人を出しこれ
見せしむるも實は國司の簾中とて諸將の妻子に
相違ふりまら取次の兵士本丸へ斯々と申達を國司父
子その意と心得るも簾中の無事小還りかひ
嬉しむに門と開く信長の使者と迎え入けるに前田
左衛門尉菅谷九右衛門尉本丸のり國司父子小拜
謁をんとを望むより國司不知齋入道對面ありたれば
前田菅谷もつ使節の禮とありてそそけるに夜前當手
の侍大將ふ木下と申す多藝谷と襲ひ國司の館に
乗り破り御簾中とてめ奉り諸侍大將の内室以下

奪ひ取り事軍のあは進項無據儀ありてあか
めは是全一信長の本意よは因り供奉し此の
方こそ送り歸り奉り抑信長元より北畠乃
御家も少も怨恨ありて軍兵と發し御城下は陣
をとりゆと國郡と奪はん為よは去りあり室町
將軍家三好の為は襲はんことをおぼ小慮は早世せ
まはしけるのち今の將軍家義兵の御旗と揚らる
めを信長速は御味方よ馳參り忽は凶徒と誅し難
く室町御所と再興あり奉りは事天下普知所あり
そのち五畿七道の間小住一國郡と領する輩いづ
も馳より將軍を拜謁し奉る然るも當家王城と去

大岡巳三編卷二十一

遠く々伊勢國に住居ありなう將軍家へ些少の會
釈ともありあはれいもんや將軍宣下の賀ともやと
ぞ偏よ三好合体の逆臣よ同一に振廻てありあはれ信長
いふも將軍家の台命と蒙りその罪と糾さんる為
小進發せしむる處あり然るも尋常小籠城とありあ
あを以て斯の如く合戦よ及ふあれ併將軍家台命と重
んせらるが故ありこそとて國土靜謐よ萬民安堵あり
むへき本意ふしを聊も不義無道の業とありゆはれその
為小簾中以下諸將の内室たち悉く送り歸り申あてい
ちや前非と後悔あり將軍尊崇の禮と厚く領
分安全の思と定めあり此迄度の合戦よ弓矢の義

理と顯ももて無益よ士卒と滅あり百姓と傷ありあ
あもんあり信長と和睦ありあはれ信長よ
ろくく京都へ執奏仕り北畠の家之首尾愛度様よ
計らひやへき新國司御前よ肥満の御病よ
て御出仕も御難儀のり承り及ひ信長り次男
茶釜丸と進らる新國司の妹御と御養子と給
たり配と御家督とあり京都の出仕と勤させ
らせらる次第よ繁昌の基よて信長決て非道乃
事とありゆはれいさる御疑念あり若又御得心
なる勇氣と頼ませり籠城あり運と天よあらせら
とんと御事あり是非ありはれ但將軍と

六月己二編卷十一

敵引受させ給ひ我々と責手とあり幾程あつてせむ
 める能く御思案あり御返答承りゆゑと申す
 るふあり國司父子前田管谷と段々の芳志辱ら由と申
 こまいつまゝの一族即從等と評定して後返答よ及ぶ
 由あり兩人と別席に請ひ種々饗應して國司父子
 一族即從うち集り評議ありけりふしのとも籠城して
 年と經ても信長を打取やらの術有へとも思われ
 又隣國ありて一敷後誥の便宜あり一度二度寄
 手と打破ても味方馳加る勢あり敵は日あつて夜も
 あり勢ありを圍らまゝ密やうの蟻のそひ出へ透間
 もありゆゑに遂に信長の為ふ攻落さる家督滅亡せ

んとよも遠く然らば信長の申さる旨に従ひ和睦と
 ろ結ひ給ひあは差當り軍を止めて國民と安泰あり
 その上籠城の兵士も一先休息して再生の思ひとあり
 急ぎ前田管谷兩人へ此むゆと御返答然りと勸
 めけるもの多ありて國司父子も此意は同心りやう
 兩人と呼迎へ朴木隼人と引合を信長の本陣へ返答の使
 み立ちまされ信長も直隼人は對面あり隼人謹て
 申けり信長の懇志と以て城中一同蘇生ていと莫大
 の仁心と申すその上木下り為る虜とあり國司の
 内室以下も送り返さる異國あり本朝あり
 いやその例とさるば此一条と以て信長の御志の如と

と感心仕り御禮の詞と知をその上み將軍家へ御疎畧ヤセ
一罪科輕の御恩あり赦免あること由實も
優曇の花あり得る心地一は是等の所厚御禮中
上の様中付ていと言上りけは信長も喜び
一使者と篤く饗應し給ひぬ織田掃部
助と使とて城中へ遣はるるに和睦の盟約と結
とすべし

織田掃部助信正左衛門尉信定の三男備後守
信秀の弟あり尾張春日井郡樂田の城主あり
國司父子の悦ひいふ約束と堅く既ふ兩家の
和睦調ひしに信長四方の寄手み下知し軍勢と上

させ給ひ諸將士等承り皆持口と退る圍と解く本陣集
りたる爰み於信長岐阜の城あり茶筌丸御曹子今
年十二才あり呼寄城中へ送らせ給へ國司父
子も心と安ん一則不知齋入道桂瀨山の陣小信長以
請對面の儀式首尾能調ひしに船江城中の輩も國
司の下知ありて城と開さげ故信長國中と平均仕
置あり給ふ不知齋隱居の身なると以大河内と退去
ありと茶筌丸小龍川三郎兵衛尉拓植三郎左衛門
尉

龍川三郎兵衛尉雄利へ北畠一族木造龍中將俊
茂乃三男あり僧とあり現常院法印とのみ然

るふ北畠の家風日くみ衰ふるをて兄左衛門尉具
康の家老柘植三郎左衛門尉と謀る織田殿又從
ひ此年大河内攻の案内し後還俗し龍川一益
り名字と請取龍川兵部少輔と改め茶筌御曹子
家督たりし時三郎兵衛尉と改め天正四年北畠
家滅ひしのち叙爵し下総守といふ織田殿亡び
流ひし太閤は從ひ羽柴とも名乗りし也
その外織田家の侍多く後見のため付らるし船江の
城よりそのを十萬石と領せしるその外織田掃部助
と南伊勢五郡の惣奉行と茶筌丸と守護とせ
二男三七郎へ關一黨の大將とあり五萬石と領し

神戸の城み住し龍川左近將監一益は北伊勢の奉行
元の如く尾州西方長嶋と兼帶そのくつてのち勢州
平均ありけるより信長八田の楠正具より奇策謀計と
設けし味方と苦しめしこと憤りしこの次八田
の城と攻落し正具と誅せしるしと仰らるしけるを木
下承たるりゆるしや宥め楠とあそ勢州國中の名士とや
へん多し充賞翫あるしこれ存しとふゆくの如く御和
睦ありし御曹子御入國のし御曹子の御とありし
侍りしけるふとちしとあていと上しゆを信長快く
へ思召ぬと大功の木下より昔も從くせ給ひけるなり木
下八田の城へ向む楠み國司父子和睦とのひ國中の支配

そく織田家より取行ふとありては御邊ありその
ふ心得ありとありては正具承り大み
歎息しこと度信長と苦し者也今日子細か
く和睦ありしものち必外の事ありて罪をわんこと疑ひふし
と信長の胸中に見透し八田の城と落て攝州へをのり
石山本願寺の寺中へ駈入薙髪して門徒乃中あそ素
もりける信長この由と聞ひいひて楠と憎ませあり
とも為方ありけし奴心りとありて勢州あり直上洛
ありて將軍家あり拜謁ありあひ北畠家和睦勢州
平均と由と言上ありあひしを將軍家あり御感あ
さめし長光の御太刀と下さし信長もさしはりてあり

そくて參内し禁裏の御普請と見分しし油断ふ
く出精の様そとふり渡さし霜月十七日京都と發
足ありて濃州岐阜へ歸陣あり
織田家譜し此年十一月千種越し上洛ありあふ
とあり枚谷の善住房の信長とくりし此時のこと
と云千種ハ勢州三重郡より江州蒲生郡田津畑
へ出る道あり

重修真書太閤記三篇卷廿一終

